

## 「中間まとめ」に関する地域説明会 村山会場における質疑応答の概要

< Q : 会場からの質問・意見

A : 検討委員会委員長、教育次長、高校改革推進室長の発言 >

Q : どのような人材を育成するのかという基本から始め、中学生や保護者、地域の代表者などに広く意見を求めて検討を進めるのはよい。

総論は賛成だが、具体的に学校をどう配置するかとなった時には、さまざまな意見がでてくると思う。

「中間まとめ」は、具体的な学校配置までではないようだが、どういう内容になるのか。

A : 学校配置の具体的な案は、検討委員会としては持っていない。

まず、この北村山地区は、どういう地域の特性があり、その中でどういう人材の育成が望まれるのかということから始めた。

次に、アンケートの結果などを踏まえ、どういう教育内容や活動が必要かということを検討した。それから、中学校卒業予定者数の減少や、部活動、教科指導で専門の先生から教えてもらえるような充実した高校にするには、3校ぐらいが適当ではないかということになった。

今ある学校をどう活用していくのかなどについては、検討委員会の検討事項ではなく、検討委員会の報告を受け、県教育委員会が考えることと思っている。

Q : 高校教育には、学校の適正規模があると思う。4～8学級程度とあるが、より具体的には7学級程度必要ではないかと思っている。

北村山地区の高校には4学級未満の学校があり、学校の適正規模について理解していれば、4校そのまま存続や、1校にまとめるという意見は出ないと思う。検討委員会での説明はどうなっているか。

A : 適正規模は4～8学級程度としている。これは、教育課程を編成する際も、集団活動などを行う場合も、望ましい規模と考えている。全国的にも、4～8学級、6～8学級を適正規模とする割合が高い。学校現場でも、経験則から望ましいとするのが一般的である。

その他、検討委員には「県立高校教育改革実施計画」の概要を説明した。

Q : 話合いの前提として、北村山は1つという考え方を伝えたのか。人口10万ほどになり、米沢市や酒田市、鶴岡市と変わらない。その中で、市や町で話をしている、できるものもできなくなる。県も、市町村合併を推進している。何年か先に学校を再編するのであれば、前提をしっかりと押さえておかないと、きちんとした学校はできないと思う。

また、県教育委員会の方針の継続性ということがある。20年ほど前の北学区の問題の際、北村山高校はしっかりした進学校、大学進学に対応した学校にしなければな

らないという方針がでて、当時の教育次長が北村山高校の校長となり、学校の活性化に努力された。そういうことを話題にしたのか。

さらに、5教振(第5次山形県教育振興計画)の前に、高校の再編整備の検討委員会があり、報告書の中で、北村山地区は、他学区に比べ職業に関する専門学科の割合が高いので、少なくする必要性が指摘されていたが、どのように話されたのか。

A :最初の、市町村合併については、県教育委員会ではなく、知事部局での対応になる。

2つ目の北村山地域に進学対応の高校をとすることは、県教育委員会としても力を入れているが、それが、成果となりつつあると理解している。今後も取組んでいかなければならないし、地域の声でもある。

3つ目の職業に関する専門学科については、今年度の4校の設置学科及び学級数は普通科5学級、専門学科7学級、総合学科5学級の状況である。県全体では、普通科が6割、専門学科が3割強、総合学科が1割弱で、おおむね6対3対1となっており、北村山地区の学科ごとの設置割合は県全体と少し異なっている。しかし、これには歴史的な経緯があるので、一律に合わせていくというのはどうかという思いはある。

Q :村山農学校は、山形中学校(現山形東高校)の分校で、札幌農学校を目指してつくられた学校だと聞いた。明治時代に山形県の教育を発展させるために設置した第3番目の学校である。歴史的観点からも、教育資料的にも、それを残して、北村山地区1校は村山農業高校を中心校として、学科やカリキュラムを改編していけばいいと思うがどうか。

A :今ある学校をどうするかではなく、この地域として、どのような人材を育てていくか。そうした人材を育てるためには、どのような教育や、生徒の活動が求められるのか。それを踏まえ、どんな学校を設置するのが望ましいかということで、検討している。わが町のわが高校、わが母校ということでは、まとまりにくくなるので、そういうことを考えずに検討していただいた経緯がある。

それぞれの学校の歴史も踏まえながら、具体的に検討していかなければならない。

Q :北村山地区だけがこのように生徒数が少なくなっているのか。それとも、県全体なのか。

A :北村山地区だけではなく、全県の、全国的である。平成26年には中学校卒業生数は、県全体で約1万1千名と予測をしている。平成16年は1万4千名だったので、3千名ほど少なくなるという中での北村山地区の減少である。

Q :アンケートでは、普通科への希望が多く、将来は大学進学希望も多いが、山形県は、農業地帯、工業団地等があり、将来の就職は、県内への要望が多い。高校教育は、もっと専門分野を集約し、県を1つにした考えでもいいのではないか。

農業高校や工業高校は各地域にあるが、希望する生徒が減少する中で、縮小される

専門高校が多くなるのではないかという懸念がある。地域の枠をはずして、専門高校の中心校をつくり、その上で、普通高校を各地域に配置する考えもあっていいのではないか。

A：検討委員会でも、専門学科の高校は1校でいいのではないか、もう少し集約して充実した学校をとという意見もあった。

例えば、この地区に、農業高校1校となった時に、他地区から理解が得られるかということも考えなければならない。通学範囲を考えると、この地区としてはいいが、置賜や庄内など他地区では困るということも考えられる。

しかし、この地区で農業教育にあたる場合には、全県をリードするような勢いを持つということは望まれることである。

Q：県内には、置賜、村山、庄内という地区があり、その枠組みをはずすと、距離的な課題がある。あくまで、北村山地区ということではなく、村山地区1つということで話をした。

A：意見の中には他の学区も含めて総合的に考えるべきということもあった。しかし、他の学区も含めれば話が複雑になるので、検討委員会に与えられたこの北村山地区の中での検討とした。

普通科は、北村山地区と東南村山地区という学区はあるが、当面、山形市方面にも通うことができるようになっている。その中で、地区内の40%の生徒が山形市方面に通学している。山形市方面に通学しなくてもいいような普通科、進学機能を充実させた高校が必要などという意見も多く報告書に盛り込みたい。

Q：どのような高校の配置が望ましいかについて、大学進学がしっかりできるような普通科の高校1校と、農業科、工業科、商業科、情報科、総合学科を含めた総合選択制の高校1校の、2校がいいと思っている。

具体的には、普通高校は楯岡高校を母体とし、総合選択制の高校は村山農業高校を母体にすべきだと思っている。歴史や伝統は大きな教育力だと思っている。どこにでもつくればいいというものではない。

Q：今回は、どのような高校の配置が望ましいかについて、3校への再編と2校の再編ということであった。第5回検討委員会では、どちらがどうという内容まで盛り込まれるのか。また、その場合、どの地域という具体的な内容で報告書がつけられるのか。

A：これから第5回の検討委員会を経て、報告書を提出する。2校案という話もあったが、地域の実情、交通の便など具体的なことを考えると、どういう高校が望ましいかという本質を見失ってしまう可能性もあり、検討委員会としては3校が大勢だった。

しかし、3校としても、将来的には2校も考えなければならないということで、必ずしも一本に絞らずに提出したい。後は、教育委員会が、具体的に検討することにな

る。

第5回検討委員会の協議内容によるが、3校案か2校案で、メリット、デメリットを記載して報告することになるのではないかと考えている。

Q：村山農業高校の寄宿舎は、3年間規則正しい生活をするすることで、卒業までに、からだも丈夫になり、精神的にも成長し評価されていると聞く。2校案でも十分やっていけると思う。

北村山地区、山形県を考えると、水田だけでなく、果樹が多く果樹王国といわれるほどである。農業で生計を立てていくためには、複合経営でないとうまくいかない。県内には、果樹の専門高校は1つもないし、設備のある学校もなく、村山農業高校が一番だと思う。

そのようなことを踏まえて、県全体を考え、村山地域の複合経営の中で農業高校をどう位置づけるのかということについても、県は考えてほしいし、意見として報告書に加えてほしい。

A：検討委員会では、4校全部視察した。生徒に直接会い、あいさつをしたり、教室での授業や、部活動なども見せていただいた。北村山地区の4校は、普通高校、農業高校、工業高校、そして総合学科の高校と全部違っている。それぞれに特徴があり、こんなに難しい再編はないと思っている。

検討委員会では悩みながら検討してきたが、さまざまな意見についても無駄にしないような内容の答申にしたいと思っている。

Q：生徒・保護者へのアンケートの結果からも、それぞれの地区の人は自分の地区への思いが強く、伝統や校風を重んじる発言が多い。

しかし、伝統などを大切にしながらも、これから入る子どもたちが、より幸せになるためにはどういう枠組みでなければならないのか、という視点が一番大切だと思う。そのことを常に頭の中に置きながら、各会場で話し合わなければ、それぞれの会場の思いだけでまとまりなく終わってしまう。

生徒や保護者へのアンケート結果では、普通科希望の割合が高く、各専門高校への希望が低い中、今までどおりに残すことが子どもたちにとって本当に幸せなのかという視点で考えた時、新たに入る子どもの気持ちで枠組みを考えなければ、一向に前には進まないと思う。自分の希望しない学科に入らざるを得ないような子どもが生じる枠組みはまずいのではないかと感じる。

ぜひ、自分たちのことだけでなく、次の子どもたちのことを考え、この北村山地区がうまくいくためにはどうしたらいいのか、という視点で、各会場で話し合ってもらえればよいと思う。

A：一番感じるのは、誰のための高校かということである。

生徒にとって、生物は生物の先生に、日本史は日本史の先生に教えてもらうべきだと思う。高校は、どこでも地域の最高学府だが、規模が小さいと、専門は生物だけ

ども、先生が少ないから物理もやろう、体育も、ということになり、生徒にとって幸福なのかと思う。

入学して部活動を一生懸命やりたいが、学校が小さいと、野球はできない、あの部はないということになる。部活動の数は、学級数の少ない学校は極端に少ない。そういう学校に子どもが入って、能力を發揮できるのか、才能を引き伸ばすことができるのかと思ってしまう。

良い教育をどの学校でもさせてあげたいと思う。学級の数で、教育の質が落ちては困る。やはり、専門の教育を受けさせてやりたいという思いがある。

以 上